

数年ぶりに再開されたエチオピア、 セミエン国立公園を訪れて

庄武孝義

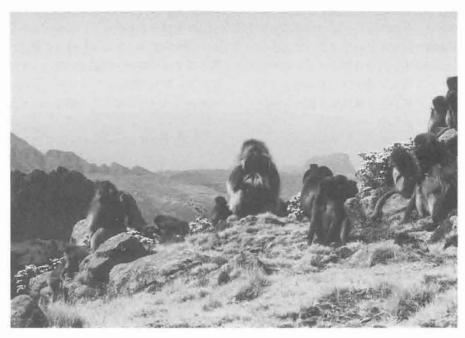
はじめに

筆者は1975年以来エチオピアを中心にヒヒ類の 種分化に関する集団遺伝学的研究を行ってきてい る。1978年10月から1979年8月まで、アジス・ア ベバの北100~115 kmのデブラリバノスからフィ チェに続く青ナイルの一支流の崖沿いに生息する ゲラダヒヒの集団遺伝学的な研究を行った。その 後、遺伝学的比較のために河合雅雄先生らによっ て社会生態学的研究がすでに行われていたセミエ ン国立公園周辺のゲラダヒヒの研究を望んだが、 政情が悪く果たせなかった。このところ1988年以 来毎年エチオピアを訪れているが、北部の政情は 悪化するばかりでとてもセミエン国立公園への調 査行は不可能と諦めていた。ところが昨年1991年 10月、文部省科学研究費によるヒヒ類の調査(河 合雅雄隊長)でアジス・アベバに入ったところ、 セミエンの調査が可能であるとの Wild Life office の言で長年の夢が叶えられることになった。しか し、この2~3年バハルダール、コンダール周辺 は旧政府軍と、EPRDF (アムハラ語でイハディ フと発音、エチオピア人民革命民主戦線)の反政 府軍とが激しく戦ったとされているところである し、Wild Life で得た情報ではセミエン国立公園 のキャンプは全て破壊されていて宿泊施設は皆無 だという。そこでとりあえず予備調査に行こうと 思い立ち、12月6日ロングホィールの新しい80型 トヨタランドクルザーに燃料(ディーゼル)を満 タン (140リットル) にし、さらにジェリカン5 本(100リットル)、テント、シュラフ、食料など を積載、はるか北方のデバルク (コンダール州) まで850kmの道を一人で運転しながら出発した。

以下の記述は予備調査を含め計3回アジス・アベバーセミエン国立公園を往復し、現地で計1ヶ月半滞在したときのもろもろの印象文である。

調査地への道

アジス・アベバから 200 km の青ナイルの谷ま ではこれまでも何度も来ているので難なく通過、 途中フィチェの町では1978年調査時に下宿してい た家に寄り旧交を暖める。当時小学生であった男 の子、ソロモンは立派に成人し、小学校の先生に なっていたし、赤ん坊だった男の子、アブラハム は中学生になっていた。8ヶ月の滞在中にとった 写真を送ってあったので皆よく覚えていて歓待し てくれた。青ナイルの大峽谷を越えて登り切った ところにデジェンという町があり、EPRDFの女 の兵士が検問をしていたが外国人はフリーパス、 ゴジャムの穀倉地帯を一気にデブラマルコスまで 走る。デブラマルコスまで350km、かなり痛ん ではいるが一応舗装道路。午後4時以降は運転す るなといわれていたけれどもまだ3時だったの で、適当な宿がなかったせいもあってさらに80 km 先のフィノートセラムの町まで走る。この町 がアジス・アベバ-バハルダールまたはコンダー ルへのバスの宿泊地で宿が沢山あると聞いてい た。少し郊外に出たところのアラバホテルという 部屋数の多い簡易ホテルで泊まる。一泊5ブル、 めずらしく水のシャワーがあった。この辺は典型 的なアムハラ族の地でテフの産地であり、おいし いインジェラとワットでビールも楽しめた。ビー ルは市場経済が導入されたせいか田舎でもヤミ値 で1本4ブル出せばたいてい飲める。アジスでは 1本1ブル。



セミエン国立公園のゲラダヒヒ。背景に北東低地がみえる

フィノートセラムからバハルダールまで約200 km未舗装、車もタイヤが新しいので砂利道を100 km 前後のスピードで走っていたらいきなりパン ク、タイヤ交換は慣れているのでそんなに苦にせ ずやり始めるも最後のスペアタイヤをはめる時に なってハタと困る。タイヤを持ち上げて車軸には めようと思うもタイヤが重くて持ち上がらない。 最初は年をとって力がなくなったと思ってがっか りしたが、後で新しいランクルのタイヤが一回り 大きいと解る。待つこと20分アムハラの農夫が通 りかかり手伝ってくれてなんとかはめこむ。途中 のダングラという町でパンク修理。タナ湖に流れ 込む青ナイルの水源の川を越え、午後3時にバハ ルダールに着く。町の入口に検問あるも外国人は フリーバス。バハルダール手前 100 km ぐらいか ら壊れた戦車、装甲車、兵員輸送車など、さまざ まな戦争車両が累々として放置されていた。その 数およそ100台、それぞれに白ペンキで SP, SC, MS, などの文字が大きく書かれていたが、後で いろいろな人にその意味を聞いたが、最後まで解 らず。砂利道の砂ぼこりに疲れ、その日はバハル ダール泊まり。タナホテルというタナ湖畔のホテ ルに宿泊、体洗いたくもお湯が出ない。自分でキ ャンピングガスと電気コイルで10リットルほどの

お湯をつくりなんとかほこりを落しさっぱりす る。テラピアの切身のフライでビールを楽しむ。 ホテルは赤十字関係の白人客3、4人のみで閑散 としている。翌日ゴンダールまでは180km、飛 ばせば2時間と思ったけれども、砂利道を飛ばす とパンクしやすいことに気づき、3時間かけて昼 にゴンダール着。この道路沿いにも壊れた戦車が 何台も放置されていたし、タナ湖から流れ出たば かりの青ナイルの橋が破壊されていて木の仮橋が かけてあった。旧政府軍が逃げるときに落とした そうだ。ゴンダールでは山上のゴハホテルで昼 食、水道は機能せず、洗面所においてあったバケ ツの水で顔と手のほこりを落とすのがやっと。ゴ ンダールからデバルクまで100km、ここもゆっ くり走り夕方4時デバルクのWildLifeのofficeに 到着。ゲームワーデンのジェマネ氏に面会。あら かじめ、アジスの Wild Life の本部から無線で連 絡してあったので歓迎してくれる。セミエンホテ ルなる簡易ホテル(1973年当時も河合隊が宿泊し たという) に投宿、夜ジェマネ氏がアフォーク氏 (デバルクの周辺の EPRDF 新政府軍の責任者、 アムハラ人で元中学校の校長先牛とのこと) を連 れてきて挨拶させられる。公園再開後、数人の ツーリストがすでに来ているが、私が初めての研



ギーチからテバルク方面をみたところ。崖が続いている

究者としての訪問とのこと。その後、セミエン国立公園へ入域するための条件を提示される。まずEPRDFの兵士二人と国立公園のスカウトを一人以上と英語の解るガイド一人を雇うこと。これにそれぞれの人が乗る馬と荷物用の馬またはミュールを借りること。計4人と馬8頭(3頭は荷物用)を雇い翌日セミエンに向けて出発することにする。

セミエン再訪

エチオピアの地図を見ると解るが、デバルクの 北は北エチオピア高原が急に高度を下げるいくつ もの崖がありデバルクの町はその崖ぶちにある町 である。その崖は東に続いていてセミエン国立公 園の東端に続いている。その東端にエミトゴッコ という海抜3960mの見晴らしの良い地点がある。 そこから南を眺めるとエチオピアの最高所ラスダ シャン山系(ピークは4530m)が一望できる。 セミエンへのトレッキングはその崖沿いに東へ行 くことになる。デバルクから北への道は崖をジグ ザクに低地へ降りる。その道は通称レマルモと言 われイタリアが建設したそうだ。それを降りてし ばらくするとティグレの領域になり230kmでア クスムの町に着くという。しかしタカゼ川の橋が 旧政府軍の敗走時に落とされたままで今は直接には行けないとのこと。バスは橋の前後の折り返し運転をしていて乾季ならば人々はタカゼ川を歩いて渡り、バスに乗りアクスム、アスマラ方面へ行くそうだ。タカゼ川はナイル水系では青ナイルに次ぐ大きな川でセミエンの山岳地帯の水は全てタカゼ川に集まりスーダンに流れ、アトバラ川となりハルツームより少し下流でナイル川に注ぐ。

国立公園の入口のサンカバまで 27 km 約 2500 mの登りであるが、さほど凹凸のないトレッキン グですむ。ネパールのルクラージリ間を3日間で 踏破した経験のある私にとってはさほどつらくも なく全然馬にも乗らず歩き続ける。目的地はさら に20km奥のギーチキャンプであるが、一日目は サンカバキャンプ止りとガイドは決まっていたら しくまだ午後3時なのにサンカバで荷を解きはじ める。セミエン国立公園はスイスが力を入れてい て公園内の各建物(ゲストハウス、スカウトハウ ス、ワーデンハウスなど)は立派な石づくりの家 だったけれども今度の解放戦争でどのキャンプの 建物も手投弾で破壊されたという。EPRDFは北 部エチオピア高原の北西部では最初このセミエン 国立公園で一番急峻な東端のチェネックキャンプ にティグレの低地から攻め上がってきたそうだ。

旧政府軍はそのために装甲車が入れる道をデバル クからチェネックキャンプまで急きょ建設したそ うだ。その名残りが残っていてその部分では人も 馬も歩きやすい。国立公園内で戦闘が約2年半続 いたといわれる。サンカバで石壁だけ残っている 建物の中にテントを張ろうと思ったけれどもガレ キを取り除くのがめんどくさくゲストハウスのす ぐ下の平地でテントを張り寝た。一晩中テントを はたく風の音に悩まされる。寒くて眠れない。随 行者達はいつの間にか羊を一頭仕入れてきて、焚 火をたきそれを焼きながら夕食にし野宿してい た。翌朝9時ごろ出発し20km 先のギーチ村 (ギーチキャンプ西方約1km にあるアムハラ・ モスレムの村) に昼すぎに着いた。出来るだけほ こりのたたないように村の有力者の家の近くの垣 根(耕作地を家畜から守るためヒースの樹で作ら れている) を風上にしてテントを二張り設営す る。地図でみるとギーチの村は海抜 3600~3800 mにあるがテントは村の最高地にあるので3800 m である。大麦の栽培限界が海抜 3800 m で村の 上は全て草原でロベリヤの木が点々とはえている だけである。ギーチ村から100mも登ると大草原 がありそれを横切って1km 北に行くと、先に述 べたデバルクから東に続いてきている崖に出る。 ギーチキャンプは村の東にあり、ヒースの林の中 あるが、現在はキャンプの回りのヒースはほとん ど切られてまばらである。キャンプから下の谷沿 いにはまだかなりの林が残っている。国立公園内 では樹木の伐採は禁じられているが、解放軍との 戦闘中、その後の混乱期を通し村人は公然とヒー スを伐採し、垣根にしたり燃料に使用している。 筆者の滞在中も2、3回見かけたのでスカウトに なぜ注意しないかと聞くと、スカウトはこの村出 身で村中親類関係になっていて見て見ぬ振りをす るより仕方がないという。キャンプの建物はワー デンの家、ゲストハウス、スカウトの家全てが破 壊されてわずか下から1mぐらい壁だけ残ってい る。

ゲラダヒヒの捕獲作戦

翌日から目的のゲラダヒヒ探しを始める。1973 ~1976年の河合隊が重点的調査した群れを見つけ るべく村から約6kmのSahah地域(海抜3900m) を重点的に調査する。250頭の群れをすぐに発見

したけれども100m以上近づけず、翌日からはガ イドと兵士(フィールドへ出るときも同行を義務 づけられている)をかなり手前で待機させて私一 人でゲラダヒヒの群れに近づき habituation (ヒト づけ)を試みる。12年前デブラリバノス、フィチ ェでやったように現地人とは違う、毎日同じ服装 で接近する。3日目から逃げなくなり10日目には 私の手から大麦をとる個体も出てきたので1月25 日に捕獲調査を決行することにする。トラップの 材料の大部分(ナイロンネット、金網((ベルギー 製))、ローブ、針金、釘など) はアジス・アベバ から持参していたが、材木はギーチ村の有力者テ スファイ氏の所有物であるユウカリの木を6本買 取り切らせてもらう。1本が長さ5m(幹の太さ 直径15 cm) で重さ100 kg 以上と思われる。ユー カリは非常に重い木である。一本の長さ1.5mの 丸太が約20本入用なので、村で切ってから運んで もらおうと思っていたら長いままトラップサイト まで運びそこで切った方が楽だというので、村人 4人を雇い運搬を任せる。2人ペアで5mの丸太 をかつぎ 6 km の坂道を 3 往復して運ぶ。トラッ プ作製は一日では無理で2日がかりで完成。トラ ップの方式は支柱20本を7m×8mの地面の周囲 に立てそれに地面から1mを金網で囲いその上に 10 m×10 m のナイロンネットを蚊帳のように張 り、入口を開いておいてヒヒの群が入ったらネッ トを地面に落し、ネットの上から麻酔をする。採 血をして最後に捕獲個体が全頭覚醒したら同時に 解放するという方式である。これまでの調査では 金網も日本から送って日本製のを使っていたが、 今回は中国製でも二重に使用すればと思い、現地 調達を決め込み日本からは持参しなかった。アジ スの町の金物店街でベルギー製の金網を見つけ、 これなら一重の囲いで大丈夫と思いセミエンへ持 参した。久し振りの捕獲調査で胸の高鳴りを押え ながら、約50頭がトラップの中に入ったとき入口 の網を落し、隠れさせていた現地雇用人を大声で 呼びながらトラップサイトまで約50m走る。ナ イロンネットを吊ってあるロープを切りながら入 口の固定をしようとしているときトラップの中に いたヒヒ達が一斉に外に逃げ出し、瞬間何が起こ ったか判らず、ただ呆然とするのみ。よく見ると 金網が破られそこから全部にげられたことが判っ た。日本製のものを使ってきた前回までの仕事で は何事も無かったのにと思いつつ、ベルギー製なら日本製と品質は変わらないだろうという判断の甘さがミスを誘った。ガッカリして帰途につく。支柱は立てたままにしてナイロンネットを外し村まで帰りつく。一度失敗したら次はなかなかトラップには入らない事は経験上判っていたから、河合隊長がアジス・アベバに来ておられるはずなので、村のテントその他の装備はそのままにして一旦アジス・アベバに三日かけて引き上げる。もちろん装備の警備のために兵士とスカウトを残す。

強盗団との遭遇

一週間河合隊長と過ごした後、2月5日アジス アベバを出て同じコースをセミエンに向から。 午後2時にゴハディションの町から青ナイルの谷 を下り始める。5分ほど下りて大きく右にカーブ しかかったときバックランプのついたローリーを 発見、不思議に思いながら左側を通って追い越そ うと思ったらローリーの運転手が体を乗り出して 何度もストップを合図し、手まねで前を見よと言 う。前方約50mのところに大きな石が幾つも構 一線に置いてあるのを発見してあわててストップ する。同時にローリーの運転手が飛び下りてきて 私のランドクルーザーに乗り移り、早くゴバティ ションの EPRDF の兵隊に知らせようと言う。ま だそのときには人かげは見えなかった。幸い私の ランクルはパワーステアリングだったので、道路 が広かったから全速力で50mほど後退し、ター ンして全速力で上に走った。バックミラーに3、 4人の人かげが見えたけれどもすぐカーブで見え なくなった。約10分かけ登ってゴハティションの EPRDF の駐屯所へ行きローリーの運転手が詳細 を報告した。直ちに7人の兵士が集められた。2 人は重機関銃を持ち弾丸ベルトを体に巻き付けて 私のランクルの屋根に登り、他の5人はカラシニ コフ銃で武装しランクルの荷台に乗って同じ道を 下る。撃ち合いでも始まったらと身の危険を感じ たので、置き石の手前 200 m の所で車を止めて下 りてもらう。兵士達はすぐに道路とその上下の崖 に散り捜索を開始する。捜索すること1時間半強 盗団を見いだすことは出来ずあきらめる。その間 に数台のバスやトラックが貯ってしまいその乗客 らが下りてきてわいわいがやがや言いながら置き 石を除き通行出来るようにする。私の車にはなお

武装兵3人が乗り青ナイルの橋まで約20km下る。狙撃されるのではないかとひやひやしながらやっと橋までたどり着く。橋を渡るとゴジャム州で、谷を登り切ったところがデジェンの町がありEPRDFが駐屯しているので心配無いと言う。急いでデジェンまでかけ上がる。

この青ナイルの橋まではつい3日前に河合隊長と日本大使館の人達を案内して来たばかりだった。大使館の人達は雄大な景色ですばらしいところだから、数日後外務省のミッションが来るので再度来ようと話していたことを思い出す。なんとか連絡しなくてはと思うけれども、その日泊まったフィノートセラムの町からは電話がうまく通ぎず、翌日ゴンダールまで走り夕方ようやく大使館に連絡した。結局大使館のミッション案内はデブラザイトになったとのこと。調査終了後、この青ナイルの谷を通った2月19日には、ショワ州側では500mおきぐらいにEPRDFの兵士が迷彩色のユニホームを与えられて警戒にあたっていた。

調査の終了

2月7日の朝デバルクに着き再度ガイド、スカ ウト、兵士を雇い、2月8日ギーチ目指して出 発。私も47kmを1日で歩くのは少ししんどいと 思ったけれども、途中サンカバで休まないことを 宣言し、ギーチまで強行する。心配されたゲラダ ヒヒは思ったほどショックを受けておらず、2月 15日ベルギー製の金網を二重に張って、首尾よく 捕獲でき、43頭の採血を行う。毎朝テントの外で は氷が張っていたのに、運悪く捕獲採血した翌日 は氷が張らなかった。天然氷で冷やして血液を運 ぶという作戦は使えず、血液の鮮度を保つために またギーチからデバルクまで1日でかけ下りる。 デバルクの宿では携帯用の冷蔵庫(民博の福井勝 義先生所有のものをアジス・アベバから借りて運 んであった) にいれて一晩冷やし、翌日早朝にデ バルクを出てバハルダール泊まりで2日でアジス ・アベバに到着。翌日アジス・アベバ大学の生物 学教室の実験室で遠心分離を行い、全血を赤血 球、白血球、血しょうに分けて凍結保存をして、 私のエチオピアでの主な仕事は終了した。

[しょうたけ たかよし

京都大学需長類研究所〕